Junior

Essay

マシュー・ウォング

Matthew Wong

床の反省

内の温もりと外の寒さを隔てているものは僕を包み込んでいる毛布だ。時間がグズグズと経って、周りの世界が少しずつ明るくなる。外を見たら真っ白ばかりだ。昨夜からずっと雪がそっと降ってきたのだ。太陽が見えないし、時計も壊れているから何時か分からない。部屋の扉から叩く音が聞こえる。向こうの声は僕の名前を呼んで、何かを言う。耳が毛布にふさがれているからちゃんと聞こえない。声はまた静かになって、足音が消えていく。そういえば、この前部屋を出たのはいつだったのか。もう今日は「あの日」から一ヶ月だ。あの日に君と笑ったり、泣いたり、遊んだりすることは全部奪われたのだ。あの時から頭がぐちゃぐちゃになっている。あの時に巻き戻せれば、どうやって直すのか。あんなにひどくてずるいことを言わなければ、目をそらさなければ、君は今まで僕のそばにいるのか。でも、今更どう考えても、何を言っても、何も変わらないでしょう。何も聞いても答えが来ないで一番苦しいのだ。

それでも、君と一緒にいる時を思い出している時、いいことしか思い出せない。自分のせいで大切な人を失っているのに、君のことを思ったら、ちょっとだけでも胸が暖かくなる。言いたいことはまだまだたくさんある。きっといつか会える。その時に僕のことを許してくれるのができるかな。できなくても大丈夫だ。そうなら、一つのことだけを言う：「親愛」のことを教えてくれてありがとう。